癒される漱石

――俣野義郎と野村伝四――

藤井淑禎

漱石の満州旅行

岩波文庫で「満韓ところどころ」（一九〇九・一〇～一二）の注解と解説を担当してから（『漱石紀行文集』二〇一六・七）、今まで以上にこの作品に関心を持つようになり、そこでの収穫からいくつかのテーマを切り出して、いろんなところで話すようになった。そして注解・解説に基づいての講演を重ねるうちに、従来は見過ごされたり、軽視されてきたことに当然のことながら目が行くようになった。

それらは大小さまざまあるが、なかでも大きなものと私が考えているのは、この満州旅行中に漱石が多くの接客業の女性たち（料理旅館の酌婦や仲居をはじめとして）と接点を持ったということと、五高時代の教え子である俣野義郎（一八七四―一九三五）と再会したということとの二点である。

前者については、この折の見聞体験が翌年の『門』（一九一〇・三～六）に、とりわけ女性主人公・御米の造型に活かされたことを「『門』の御米―満韓旅行の副産物」（『成城文芸』二〇一九・四）で論じているのでそちらをご覧いただくとして、今回はもう一つの目玉である俣野義郎（「満韓ところどころ」では「股野」と表記している。正式には「俣野」とのこと）について考えてみたい。副題に「と野村伝四」とあるのは、先走っていえば、「癒し」という観点からみた時には、帝大英文科時代の教え子である野村伝四（一八八〇―一九四八）と俣野とのあいだには多くの共通点があったと考えているからだ。

周知のように、この時期漱石は旧友で満鉄総裁である中村是公の招きで渡満したのだが、この「中村是公の招き」というのが、私としては怪しいと思っているのである。これは注解・解説以降に気が付いたことなのだが、実は渡満の年である一九〇九年の前半に漱石は二つの青春回顧のエッセイの中で是公との青春時代を追懐しているのである。一つは「私の経過した学生時代」（一九〇九年一月号の『中学世界』に発表されたが、雑誌の発売は前年一二月）であり、もう一つは東西朝日新聞のうちの『大阪朝日新聞』のみに掲載された「永日小品（二五）変化」（一九〇九・三・九）である。

どちらも一緒にアルバイトをしていた本所の私塾の寄宿舎から両国橋を渡って一ツ橋の予備門に通っていた頃の貧乏生活の思い出だが、この二つのエッセイとその前後の是公がとった行動との相関性が面白い。かりに「私の経過した学生時代」をA、「永日小品（二五）変化」をBとすると、こんなふうな時間関係になる。

まずAが発表された直後の〇九年一月の末に、是公が突然ずいぶん久しぶりに使いを寄こして、話がしたいから築地の料亭まで来てほしいと言ってきたという。ところが当日は大変な強風で、午後には用事

もあったので、結局行かずじまいになった。「それでとうとう逢わずに仕舞った」(B)。

ところが、にもかかわらず(あるいは、それゆえに)、漱石はまたしても是公との思い出をエッセイに書く。三月に発表されたBである。そこでは「とうとう逢わずに仕舞った」のあとは次のように続けられている―「昔の中村は満鉄の総裁になった。昔の自分は小説家になった。満鉄の総裁とはどんな事をするものか丸で知らない。中村も自分の小説を未だ曾て一頁も読んだ事はなかろう」。そしてこうしたやりとりのあとに、しばらくたってから、いよいよ是公からの働きかけが本格化する。七月三一日の午後に突然漱石宅にやってきて、「満州に新聞を起こすから来ないか」と誘ってきたのである。

このあと、漱石と満州をめぐっては、入社の勧誘なのか視察旅行の誘いなのか、漱石も迷うようなやりとりが交わされることになるが、とりあえず漱石の渡満時までには視察旅行の誘いという線に落ち着いたかに見える。ただし、その後も入社勧誘はくすぶり続けたといえなくもないが。ここで前述の、是公の招きといえるかどうかは怪しい、という所に戻ると、見てきたようにこの時期執拗に是公にラブコールを送っていたのは漱石であり、それにこたえる形で是公からの招きが実現した、というのが実際のところなのではないだろうか。要するに、漱石からの「おねだり」を受けて是公が動いた、とみることも可能なのである。もっとも、AにしろBにしろ(特にBは大阪版のみなので)、是公がみずからこれらを読んだ可能性はほぼゼロに近いと思う。ただ、部下なりを通じて知る可能性はあったのではないか、と考えているのだが、どうだろうか。

ところで、どちらの意向が強く働いていたのかはさておき、とにもかくにも漱石の満州行きは実現した。神戸港を発つ二週間ほど前の八月二〇日には、これまでの生涯で最悪ともいうべき「劇烈な胃カタール」(日記)の発作を起こしていたにもかかわらず、いわば強行突破の

癒される漱石

かたちで船上の人となったのである。

俣野義郎との再会

大連上陸は九月六日だが、その翌日には本稿の主人公の一人であり、当時満鉄社員であった俣野義郎の訪問を受けている。満鉄本社で視察場所をめぐって相談をしているところに俣野が飛びこんで来たのである。

> 所へ何処からか突然妙な小さな男があらわれて、やあと声を掛けた。見ると股野義郎である。昔「猫」を書いた時、その中に筑後の国は久留米の住人に、多々羅三平という畸人がいると吹聴した事がある。当時股野は三池の炭坑に在勤していたが、どう云う間違か、多々羅三平は即ち股野義郎であると云う評判がぱっと立って、仕舞には股野を捕まえて、おい多々羅君抔と云うものが沢山出て来たそうである。

これに憤慨した俣野が漱石に取り消しを要求してきたことは有名な話だが、結局俣野の実際の出身地である久留米を登場させたからこうなってしまったのだということになり、作中の多々羅三平の出身地を多々羅の浜のある肥前唐津とすることでトラブルは決着している。その「因縁浅からざる股野」に大連で「全く思いがけ」ず「ひょっくり出逢う」ことになったのである。

この日(七日)は是公の案内で朝から日本橋、電気公園、中央試験所、税関などを見てまわったが、俣野と再会してからはもっぱら俣野が案内役となって、旅順にまわるまでの二日間(八、九日)を精力的に大連のその他の地域をみてまわった。北公園、川崎造船所、「東洋第一の煙突」を誇る発電所、大豆の製油工場、大豆の取引会社、埠頭事務所、

癒される漱石

などである。

そしてその見学の合間に、漱石は俣野宅へ泊ることを誘われた。

股野が先生私の宅へ来なさらんか、八畳の間が空いています、夜具も蒲団もあります。ホテルにいるより呑気で好いでしょうと親切に云って呉れる。何でも股野の家の座敷からは、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取る様に眺められるのみならず、海の向うに連なる突兀極まる山脈さえ、坐っていると、窓の中に向うから這入って来て呉れるという重宝な家なんだそうである。

最初は聞き流していた漱石だったが、そのうち「折角の好意ではあるし(中略)都合によっては少し厄介になっても好い位に」思い始め、それを是公に打ち明けると、とんでもないということになった。是公が、さらには新聞社が招いた賓客なのだから、一社員の家になど泊めるわけにはいかない、というわけなのである。言われてみれば当然の話なので、漱石はあっさり是公の忠告を受け入れる。

俣野効果の威力

こうして泊ることはかなわなかったが、それでも漱石は俣野の家へ遊びには行っている。その折の記述は、漱石がそこで満喫した安らかな気分を過不足なく表現している。

成程小山の上に建てられた好い社宅である。尤も一軒立ではない。長い棟がいくつも灰色に並んでいるうちの一番はずれの棟の、一番最後の番号のその二階が彼の家族の領分であった。岡の下から見ると、丸で英国の避暑地へ行った様だとある西洋人が評した程、外部は厚い壁で洋式に出来ているが、中には日本の香がする奇麗な畳が敷いてあった。成程景色が好い。大連の市街が見える、大連の海が見える、大連の向うの山が見える。股野の家には勿体ない位である。余は其処で村井君に逢って、股野の細君に逢って、手厚い御馳走になって帰った。

ロシア時代の邸宅を転用した上級社員向けの社宅は、鉄道(ハルビンと旅順をつなぐ東清鉄道支線)をまたいで新たに作られた跨線橋である日本橋の北方地域(漱石が泊ったヤマトホテルもここにあった)にかたまっていたが、長い棟がいくつも並んでいるという社宅ビル群は日本がロシアに代わって遼東半島を租借してから建設されたもので、大連中心部の大広場の南西の、近江町と呼ばれる地区にあった。それよりもさらに南にある南山地域の裾野にあたる一帯である。

それはともかくとして、この訪問記で見逃せないのは、「避暑地」、「日本の香がする奇麗な畳」、「景色が好い」、山や海、「勿体ない位」等々の一種のほめ言葉が、実際の居心地だけを表していたのではなく、むしろ、癒され、解放された漱石の心的状態こそを雄弁に物語っていたという点だろう。「股野の細君に逢って、手厚い御馳走になって帰った」という謝辞も、そうした文脈でこそ受け取られるべきものなのである。

その意味では、九日の日記にある「俣野の二階comfortable」という書き込みこそは一連の感想の頂点にある表現であったと言うこともできる。のちに漱石はこの折のことを概括して次のように述べている。

斯う云う訳で余と因縁の浅からざる股野に、此処でひょっくり出逢うとは全く思いがけなかった。しかも、その家へ呼ばれて御馳走になったり、二、三日間朝から晩迄懇切に連れて歩いて貰ったり、昔日の紛議を忘れて、旧歓を暖める事が出来たのは望外の

仕合せである。実を云うと、余は股野がまだ撫順に居る事とばかり思っていた。

概括とはいっても、「満韓ところどころ」のなかではこの部分は、先に紹介した満鉄本社での再会場面の直後に出てくる。そして実際の交流場面はだいぶ先のほうで具体的に描写されている。つまり、漱石の気持ちに寄り添って整理すれば、再会した場面で早くも「望外の仕合せ」を先取りして表明し、さらにあとのほうで、数日間の大連案内と俣野宅訪問を具体的に記述した際にも、見てきたような感謝の念を改めて表明していたということになるのである。慢性の胃病を抱えているにもかかわらず強行スケジュールに追われた満韓旅行において、愛してやまない(!)教え子の俣野と過ごした数日間がいかに漱石にとって貴重なひとときであったかがわかる。「俣野効果」とでも呼ぶしかない癒しと安らぎの空間が漱石を包み込んでいたのだ。

漱石と俣野との交流は、漱石が五高勤務時代の一八九七年九月に熊本での四度目の住まいに転居した際に俣野が書生として住み込んだ時に始まる(荒正人『増補改訂　漱石研究年表』一九八四)。その後俣野は漱石の帰京より一足早く、一九〇一年には東京帝大法科大学に進学。ロンドン留学中(一九〇〇・一〇～一九〇二・一〇)の漱石とは、手紙のやりとりや留守宅訪問などのかたちでつながっていたが、対面での交流が復活するのは、漱石がロンドンから帰ってきて千駄木に居を定めてからである(一九〇三年三月)。

もう一人の主人公・野村伝四

翌年七月には法科大学を卒業し、三池炭鉱に就職するも、『吾輩は猫である』での多々羅三平の言動からもわかるように勤務地は東京であり(「ある会社の鉱山部」)、卒業後も遠慮なく漱石宅を訪問する日々が続いた。「三平君は以前の関係から時々旧先生の草廬を訪問して日曜抔には一日遊んで帰る位、此家族とは遠慮のない間柄である」(『吾輩は猫である』)。細君や「とん子」「すん子」ともフランクに会話を交わす場面も作中には頻出するが、同じ頃俣野に劣らぬ気安さでしばしば漱石宅を訪れていたのが、本稿のもう一人の主人公である野村伝四だったのである。

俣野大観先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寝転んで話しをして居ても　小言言はれないと僕の家にて寝転ぶもの曰く俣野大観曰野村伝四半転びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁危坐するもの曰く野間真綱曰く野老山長角(野間真綱宛漱石書簡、一九〇四・七・二〇)

恩師宅で平気で寝ころぶ豪傑二人が、俣野と伝四だったというわけである。もっとも、漱石はそうした二人を敬遠していたわけではない。実際は逆で、そうした遠慮の無さやストレートに自分のふところに飛び込んでくる彼らの天真爛漫さに、漱石は何にもまして癒されていたのである。俣野との書簡のやりとりは俣野の海外生活が長かったこともあってか多くが散逸しているが、伝四宛のそれは、法律出身の俣野と違って文学畑(英文科)ということもあって多く保存されており、それらを見ると漱石がいかに伝四の大らかな人柄に魅了され、癒されていたかがわかる。

昨日散歩の序同学舎の前を通れり没趣味にして且汚穢極まる建物なり伝四先生此内に閉居して試験の下調をなしつつあるかと思へば気の毒の至りなり。／伝四先生の答案を瞥見せり伝四先生のパラフレーズはパラフレーズにあらずミスプレースなり(〇四・六・一七)

癒される漱石

君が英文が下手なのは書物を沢山読まんからである、小言を申す我輩も決して上手ではないが日進月歩の今日弟子たるものは先生を凌がなくてはいけないから其積りで多少工夫して書物を読まねばいかんよ伝君以て如何となす(〇四・六・一八)

日付を見ればわかるように、連日のからかいであり、「指導」なのである。さらには、パナマ帽を買えば「爾後カブツテあるき候間驚きにならぬ様」(〇五・七・二)とおどけてみせたり、新作が出れば「是非買つて読んで而して褒めて頂戴」(〇五・一一・三)と賛辞を催促する。伝四のほうも負けてはいない、「伝四が来て雑煮を食はせろといふから一緒に晩餐を食った」(野間真綱宛、〇五・一・二)。あるいは、虚子らには猪の雑煮をふるまったが「君はもう二返食つて居るから呼ばなかつた」(伝四宛、〇五・一・四)とわざわざ断るほどの伝四に対する遠慮の無さだ。

とにかく、一貫して、「伝四はのんきな事をいつて居ます」(皆川正禧宛、〇五・九・二五)、「野村伝四抔は気楽なものである」(森田草平宛、〇六・一・八)、「野村は気楽らしい」(野間真綱宛、〇八・六・一四)といった調子であり、実像はともかくとして漱石の伝四像は驚くほど変わっておらず、そうした伝四像に癒され続けていた漱石がここにはいたというわけである。

ところで漱石にとって癒しの双璧ともいうべき俣野と伝四だが、彼らとても卒業し就職もすれば、以前のようにそれほど頻繁に恩師宅を訪問することなどできなくなる。まして東京を離れることにでもなればなおさらである。俣野の場合、三池炭鉱在職時は東京にいたようだが、一九〇七年には満鉄に転じ、大連に赴任している。伝四のほうは、卒業後は錦城中学校教諭をしばらくしたあと、一九一一年には私立関西中学校教諭として岡山に赴任している。

書簡のやりとりや『吾輩は猫である』中のエピソードに基づいてごく大ざっぱに言うとすれば、漱石が俣野と伝四に癒されていたピークは『吾輩は猫である』を書き出す一九〇四、五年頃とみることができる。しかしそんな彼らも卒業後は次第に足が遠のき、やがては東京を去っていく。漱石の寂寥、思うべしだ。そんな心境だったからこそ、一九〇九年の満州での俣野との再会が「望外の仕合せ」と実感されたのだろう。

青年文学者たちとの交流

ところで「癒される漱石—俣野義郎と野村伝四」というタイトルからすれば、このあたりで筆をおいてもいいわけだが、「癒される」のところに重点を置けば、俣野・伝四以外の青年たちとの交流も一瞥しておくほうがいいかもしれない。俣野・伝四との交流がもっぱら人間味レベル(?)のものであったのに対して、以下で見ていくもう一つの交流は文学がらみのものであり、青年文学者たちがその相手だった。いわゆる漱石門下として知られている、小宮豊隆、森田草平、阿部次郎、安倍能成、鈴木三重吉といった面々である。

ここで『吾輩は猫である』の執筆に端を発する漱石における職業作家への道を確認しておくと、周知のように、一九〇七年には帝大をやめて朝日新聞に入社している。実は、漱石の新聞社入りには表向きとは別のもくろみがあった。漱石宅へ出入りする青年文学者たちと文学活動をともにし、あわせてそれが彼らの糊口の一助ともなればと皮算用していたのである。

朝日入社以前に読売新聞から誘いがあった時に、交渉役の滝田樗陰に「今度の御依頼に就て尤も僕の心を動かすのは僕が文壇を担任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か余裕を与へてやりたいと云ふ事である」(一九〇六・一一・一六)と言っていたこと

からもそれはわかる。朝日新聞の場合、それは具体的には文芸欄の発足によってかなえられるはずだったが、朝日文芸欄の発足は、何と漱石の入社から二年以上も経った一九〇九年一一月まで待たなくてはならなかった(〜一九一一・一〇)。

朝日文芸欄の発足を契機として、朝日新聞紙上での漱石と門下生たちとの創作や評論活動の連携・共振は佳境に入ったとみることができる。詳しくは拙稿「朝日新聞入社・朝日文芸欄始末」(『国文学　解釈と教材の研究』一九八九・四)を見られたいが、そうした文学上の共振に先立って、私生活上の交流・共振のほうはすでに朝日入社前後から始まっていた。

小宮豊隆は、一門総出の二度の引っ越しの手伝いや煤煙事件(一九〇九)の際の庇護が師弟の関係を決定的に深め、そうした師弟の親和状態が『三四郎』(一九〇八・九〜一二)に反映して、作中のエピソードとして描かれたのみならず、「静穏の調」「和煦の気」をも作品にもたらすことになったと述べている(「木曜会」『阿部次郎・小宮豊隆・木下杢太郎集』一九五三・一一、『夏目漱石』一九三八)。

最晩年の漱石

しかし、こうした森田や小宮を中心とする文学上の弟子たちとの蜜月ぶりは、長くは続かなかった。青年たちとの二人三脚がまずまず順調にはこんだのは朝日入社から文芸欄時代前期(修善寺の大患＝一九一〇・八まで?)までで、その後は、大患をキッカケとする漱石の心境の変化と弟子たちの増長とも言える変貌ぶりによって、親和的な関係は崩壊していく。そのあたりのことについて、小宮は前掲の「木曜会」において次のように述べている。

先生は、然し、修善寺で大病をしてから、変った。／先生の変ったのは、修善寺で大病をした結果、先生の人生観が変ったからだった。先生は修善寺で大病をしてから、死の問題を真面目に考えなければならないようになった。同時に先生はその眼で自分の過去の生活を眺めて、自分の生活が、味わう生活から離れて闘う生活に始終して、齷齪ばかりしていることを認めなければならなかった。先生は風流の生活を、東洋流の文人の生活を庶幾するようになった。(中略)

そういう立場に立って我々若い弟子達の言うことすることを視聴きするとすれば、仮令それが思い昂りや己惚れを伴っていなかった場合でも、何か先生には厭わしい言動として、顔をそむけたい気になったにちがいないのである。況やその我々が、いい気になって増長し、人生だの芸術だの、実はなんにも分っていもしないくせに、さもさもその道の奥儀を心得てでもいるような顔をして、先生に議論を吹っかけるのみならず、自分達は新しいが先生は古いなどときめつけて、先生を舐めてかかるような態度をさえ示すことがあったのだから、先生は寧ろ我々に愛想をつかし、なるべく我々の相手になりたくなかったのに違いないと思う。

癒される漱石

俣野・伝四といった〈心の弟子たち〉を失ったのに続いて、今度は、それと入れ代わるようにして交流を深めていった文学の弟子たちをも失うことになったのである。そんな漱石が晩年すがるようにして癒しを求めたのが、芥川龍之介、久米正雄といった「ヤンガー・ジェネレーション」(『夏目漱石』)の文学青年たちであり、最晩年に交流を持った鬼村元成、富沢敬道といった文学とは無縁の修行僧たちだったのである。

文芸欄廃止(一九一一・一〇)の二か月後に書かれた「彼岸過迄に就て」のなかで述べられていた理想の読者像＝「文壇の裏通りも露路も覗いた経験」がなく「全くただの人間として大自然の空気を真率に呼

癒される漱石

吸しつつ穏当に生息しているだけ」の「教育あるかつ尋常なる士人」、というのもこのことと関連があるが、これが森田や小宮の対極にあり、むしろ鬼村・富沢や芥川・久米(まだ「文壇の裏通り」には出入りしていなかった)らの側に立つ人物像であることは明らかだろう。そうだとしたら、漱石は最晩年において俣野・伝四といった〈心の弟子たち〉との交流の復活を夢想し、芥川・久米や鬼村・富沢らとの交流の中にかつての癒しの再現を期待していたのかもしれない。

プロフィール

一九七九、四〜一九九〇、三、東海学園女子短期大学勤務。現在、立教大学名誉教授。主著に『不如帰の時代』『小説の考古学へ』『清張闘う作家』『乱歩とモダン東京』『水上勉』『「東京文学散歩」を歩く』などがある。